

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 年～2010 年

課題番号：20520406

研究課題名（和文）南琉球西表方言文法の記述的研究

研究課題名（英文）A Descriptive Study of the Southern Ryukyu Iriomote Dialect

研究代表者

金田 章宏（KANEDA AKIHIRO）

千葉大学・国際教育センター・教授

研究者番号：70214476

研究成果の概要（和文）：琉球方言のなかの八重山西表方言について、その文法現象、とりわけ名詞、動詞、形容詞の語形変化のシステムと諸語形の意味用法、および派生形式の意味用法について詳細に記述し、その体系の概要を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research deals with grammatical phenomena in the Yaeyama Iriomote dialect of the Ryukyu Islands, especially the inflection of nouns, verbs and adjectives, including a detailed systemic description of word forms as well as their semantic analysis and usage.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
20 年度	800,000	240,000	1,040,000
21 年度	700,000	210,000	910,000
22 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総 計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言、記述文法、形態論、名詞、動詞、形容詞、西表、八重山

## 1. 研究開始当初の背景

日本語諸方言のなかでもっとも研究の進んでいるのは琉球諸方言である。そのなかでも、八重山諸方言は各内部のバリエーションがきわめて大きく、おなじ竹富町内であっても、島が違えば言葉が通じないといわれるほどの方言差が存在している。

近年、八重山地域では地区ごとの調査が徐々に進んできているが、1 地点について文法現象などを網羅した体系的な調査研究は、石垣方言などまだ一部にかぎられている。西表島西部の祖納地区は〈節祭〉という国指定の重要無形文化財を伝承する伝統集落であるが、おなじ方言を使用する隣接する干立地区とあわせても、方言話者はせいぜい数十

人でいどとみられ、まさに消滅の危機に瀕している。それにもかかわらず、これまでに語彙集や音声音韻に関する調査報告書がわずかに見られるていどで、とくに文法に関してはまったくといってよいほど調査が行なわれていない。

こうした状況にある八重山諸方言の諸相を明らかにすることは、文法についても音韻についてもバリエーションの大きい琉球諸方言の成り立ちを明らかにするためにきわめて大きな意義をもつものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、西表島祖納地区の文法体系を詳細に明らかにすることである。とくに

主要な品詞である名詞、動詞、形容詞について、名詞ではそのすべての格形式の確認とその意味用法の記述、人称代名詞と指示代名詞のシステムと意味構造、名詞などのとりたて形式の意味用法、動詞ではその活用体系と派生形式の意味用法（アスペクト・テンス・モード）、述語名詞をふくむ形容詞についてはその活用体系と派生形式の意味用法、さらに敬語表現の諸相、条件形と各種の条件表現、終助辞などの文末表現などである。

この地区の方言をひとつのまとまった体系としての言語にとらえ、こんご同様に記述されていくであろう八重山地区のほかの諸方言と比較対照することで、八重山諸方言の成り立ちを考察し、琉球諸方言における位置付けを明らかにしていくことになる。このうち本科研では祖納方言の文法を可能な限り詳細に記述することで、最終的にはこの方言の詳細な文法書の編纂を目指す。

八重山諸方言のそれぞれを詳細に調査研究する必要がある理由に、奄美や沖縄、宮古といった琉球諸方言の他地域と比較して、八重山諸方言内部のバリエーションの大きさと言語のさまざまな要素が複雑に入り込んでいることがあげられる。この複雑な様相を解き明かすことによって、琉球諸方言研究全体の発展に大きく寄与することが期待されるのである。

### 3. 研究の方法

島の高齢者の個人語の記述を出発点として、語形変化する品詞のさまざまな語形を把握、確認し、その意味用法、類似語形との相違点などについて記述を行なう。個人語を出発点とするのは、内部の体系性をより明確化することが可能だからである。代表者はこの方法により、伊豆諸島の八丈方言の調査研究を行ない、一定の成果を上げている。

個人語の体系性がおおよそ明らかになった段階で、その規則性、一般性をほかの個人語との比較で確認していく作業に入る。特徴的な語形や意味を複数の話者に確認することを通して、資料の信用性を確かなものにしていく。

本研究費を中心に西表島祖納地区在住の前大用安氏のもとを期間中の3年間で20回ほど（毎回8時間ほど聞き取り調査を行なった）たずね、録音を文字化して分析するという方法をとった。

具体的には、まず先行研究にしめされた方言資料をひとつひとつ確認したうえで、方言現象のより正確な実態にせまっていく。基本的に調査票などは使用せず、話者の言語意識の把握を最優先しながら、これまで知られていなかった語形とその文法的意味や文法カテゴリーなどを探しだし、方言全体の体系的な記述を目指す。

こうしたことからわかるように、あるテーマ、調査項目について、いちど質問して終わり、というのではなく、おなじような語形についても、さまざまな角度からなんども繰り返し質問し、時間をおきながら類似の語形を含む例文を増やしていく。こうした作業を繰り返すことで、より一般化された文法的意味の抽出が可能になる。ある語形の文法的意味がひとつだけであるとはかぎらないので、さまざまな可能性を考慮しながら資料を増やしていく。調査票などを用意しないのは、インフォーマントの言語意識、言語感覚を最優先し、なにを基準に語形などを区別するのかをより自然な形で引き出すためである。

### 4. 研究成果

本研究期間の成果として、まず名詞の格形式とそれぞれの語形の意味用法、格のとりたて形式の意味用法を詳細に記述した。格形式には、主語、直接補語、間接補語、規定語、状況語などに使用されるハダカ格、主語と規定語に使用されるヌ格、直接補語に使用されるバ格、このほかに間接補語や状況語などに使用されるナ格、ナリ格、ツティ格、ミー格、シ格、ットウ格、ラ格、マディ格、マディナ格、マデン格が存在する。これらの語形ごとに、名詞一般におけるそれぞれの語形の文の成分としての役割を明らかにした。このうち、意味の類似するナ格、ツティ格、ラ格については意味の分布を整理した。また、格形式の周辺に存在する比較のユンカ形や並立のットウ形などについて記述した。

とりたて形式には標準語のハに対応するメ形とヤ融合形、モに対応するン・ミン形がある。このほかにナ形、ンダン形、ガナ形、サゲ形、ニシ形、マディ形、スコ形、キヤー形、バレ形、フェー形、フドゥ形が存在し、とりたての中核に位置する係り結びのゾ由来のドゥ強調形とともにモーダルな表現に参加する。ドゥ強調形については、少ないことを強調する数量のとりたてと、焦点化、強調、対比などをあらわすものごとのとりたてにわけて記述した。

一人称代名詞単数形にはパー、バヌ、パーミなどの語形があるが、そのうちのパー、パーミについては「わが」「わがみ」に由来する可能性、すなわち、主格として基本的なハダカ格とヌ格以外に、ガ格が存在した痕跡のあることについて指摘した。

また、琉球諸方言に広くみられる現象であるが、一人称複数形に包含形と排除形のあることを確認した。ただし、この方言の両形はバハダンとパンキャのように、接辞の違いで区別するほかの例とはことなり、bとpという別の音声ではじまっている。しかしおそらくこれも、もとをたどればワガ系とワヌ形の違いにさかのぼることができるだろう。

このほか、人名や地名といった固有名詞のハダカ格がそのまま規定語になることを指摘した。さらに、規定語が複数かさねて使用されたばあいの格形式の組み合わせタイプについても分析した。(以上「沖縄西表(祖納)方言の格ととりたての意味用法」)

形容詞については、活用のタイプが基本的に2つで、語彙数ではアウサイ(青い)、インチカイ(短い)など(サ)アリ系が多数を占め、アハッシル(赤い)など、活用の点でより動詞性の強い(シ)フリ系は語彙数が少ない。これらのほかに、シキ(すきだ)、ンバ(いやだ)など語幹+コピュラ型の形容詞、ミサン(いい)、ミヤン(ない)などの特殊活用の形容詞が存在する。

また、感情感覚形容詞の終止形に中立的な～イ終止形と詠嘆的な～ヌ終止形があり、後者はおもに感情を込めて感嘆文的に使用される。

連体形には～ル連体形と～ヌ連体形があり、前者は時間に関わる、より具体的なアクチュアルな用法で使用されるのに対し、後者は時間に関わらない、より属性的なポテンシャルな用法で主に使用される。

～ヌ終止形と～ヌ連体形の違いは、アクセントにもあらわれ、中止形に由来する～ヌ終止形ではヌが高く、名詞用法もある～ヌ連体形はヌで下がる。

このほか、形容詞語幹の連体用法とこれに連続する名詞ハダカ形の連体用法、その一語性のていどなどについても記述した。(以上「八重山西表方言の形容詞」)

動詞については、さまざまなアスペクト形式の意味の独自性と重なりなどを明らかにした。具体的には、完成相には総合形のヌムン形と分析形のヌミス形が存在し、先手発言か受け手発言かや、疑問詞疑問に対する答えか、Y/N質問に対する答えかなどで、意味用法を分担しあっている。

継続相にはヌミブ形とヌミル・ヌミドゥル形が存在し、ともに現在の継続をあらわすという共通点を持ちながらも、結果性の有無や臨場性などで対立している。語構成の方法としては、ともに本動詞と補助動詞フリからなり、前者は分析形、後者は総合形となっているのだが、もともと現在の意味に使用されていたヌミル・ヌミドゥル形が結果性のほうに意味の範囲を広げていった結果、あらたに現在のアクチュアルな継続を積極的にあらわす分析形のヌミブ形が成立したものとみられる。ヌミブ形については、標準語のシテイルにくらべて、変化の結果の継続をあらわしにくく、変化の継続の意味をあらわしやすいようである。

痕跡相にはヌメル・ヌミダル形とヌミブレ

ル形があり、現在や過去の痕跡からの推論、反実仮想など、かなりの用法で重なりあいながら、それぞれに中心的な用法をもっている。ヌミブレ形はヌミブ形の補助動詞ブをヌメル形のブレルにしてつくられたものだが、もとのヌミブ形があらわしていた動作や結果の継続の意味はまったくあらわさない。

以上のアスペクト形式の意味用法について、それぞれの形式のテンス語形ごとに記述した。(以上「沖縄西表島祖納方言 アスペクト・テンス・ムード体系の素描」)

この方言の動詞の活用は基本的に2タイプである。語彙としては標準語の強変化動詞と弱変化動詞に対応するものがおおい。典型的な2タイプである強変化的なI型と弱変化的なII型のほかに、I型の変種が4タイプ、II型の変種が2タイプ存在する。I型とII型が混ざりあった混合型も2タイプみられる。またそのほかに不規則変化とすべき動詞が5タイプ5動詞確認された。結果として15タイプの存在が明らかになったことになる。

ここで使用したタイプ分けの方法は、基本的に否定形の作り方(強変化動詞は～aない、弱変化動詞は～iない、～eない)で分類する標準語などとはことなり、肯定終止形と否定終止形、それに肯定連体形の三つの語形をタイプ分けしたものである。

その理由は、この方言の動詞の肯定終止形の末尾母音にはi、e、o、uの4母音があらわれ、否定終止形の末尾母音にはa、o、uの3母音があらわれる。つまり、oとuは肯定にも否定にもあらわれることになり、標準語などのような分類ができないのである。また、連体形にはルのあるII型の長い語形と、それのないI型の短い語形とがあるが、混合型ではその両方があらわれる。

こうしたなかで、II型の動詞のなかには、完成相連体非過去形(～スルのかたち)と結果継続相連体非過去形(～シテイルのかたち)とが、アクセントもふくめて同音形式になるタイプと、アクセントによって区別されるタイプのあることが明らかになった。

ほぼ同数のタイプを有する石垣方言とは、タイプを構成する動詞の種類など、その内容がかなり相違していることも明らかになった。石垣方言や竹富島方言との比較については稿をあらためたい。

この論文の冒頭には、動詞完成相の基本的な活用表と、広義の文法的な派生形式をのせてある。(以上「沖縄西表島(祖納)方言動詞の活用タイプ」)

このほかにも、公刊はされていないが、動詞の自他の対応関係について、もともなった動詞の違いなどによる分類を行なった。このなかで、自動詞と他動詞が同形になる klisuN

(切れる・切る)のような対が4例ほど確認された。

上に述べたoとuが終止肯定形にも終止否定形にもあらわれることにより、同一語幹の自動詞と他動詞で、narabuN(並ぶ)－narabiN(並べる)のように、自動詞の肯定形と他動詞の否定形がともに narabuN(並ぶ・並べない)と同音になったり、ぎゃくに同一語幹の他動詞と自動詞、baruN(割る)－bariN(割れる)で、他動詞の肯定形と自動詞の否定形がともに同音の baruN(割る・割れない)となったりする例がでてくる。

あるいは、ある動詞の肯定形がべつの動詞の否定形と同音(huN(閉める／くれない)、iruN(要る／入れない)、kuN(借りる・漕ぐ／来ない)になるような例もみられることになる。(以上「沖縄西表島(祖納)方言動詞の自他のタイプ」)

以上の調査研究により、西表方言の文法体系の概要を把握することができるようになった。しかし、現段階ではあくまでもまだ概要であり、それぞれの内容についてさらに詳細な調査が必要であって、今後も継続して研究を深化させていく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①金田章宏、「沖縄西表島(祖納)方言動詞の活用タイプ」、『琉球の方言』35号 pp.39-58、法政大学沖縄文化研究所 2011.3

②金田章宏、「八重山西表島方言の形容詞」、『国文学解釈と鑑賞』74巻7号 pp.133-142、至文堂 2009.7

③金田章宏、「沖縄西表(祖納)方言の格ととりたての意味用法」、『琉球の方言』33号 pp.19-63、法政大学沖縄文化研究所 2009.3

〔学会発表〕(計3件)

①金田章宏、「沖縄西表島(祖納)方言動詞の自他のタイプ」、沖縄言語研究センター定例研究会 2010.12.11

②金田章宏、「八重山西表島方言動詞の活用タイプ(試案)」、第2回 琉球諸語研究会(琉球大学 2010.8.7)

③金田章宏、「西表祖納方言の動詞について」、沖縄言語研究センター定例研究会 2010.1.23

〔図書〕(計1件)

金田章宏、「沖縄西表島祖納方言 アスペクト・テンス・ムード体系の素描」、須田・新居田編『日本語形態の諸問題』ひつじ書房 2010

〔産業財産権〕

#### ○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

#### ○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.akaneisc.com/Default.aspx>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

金田章宏 (KANEDA AKIHIRO)

千葉大学・国際教育センター・教授

研究者番号：70214476

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：